私たちのcolor

colorful

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私たちのｃｏｌｏｒ

【Ｎコード】
Ｎ１９１１Ｘ

【作者名】
ｃｏｌｏｒｆｕｌ

【あらすじ】
中学生６人の日常生活です
駄文ですが国語の成績３なりに頑張って書いています

紹介します（前書き）

読んでくださるのですか??
ありがとうございます

紹介します

子供の頃に「無」になってしまった少女とその双子の弟。
そして、幼馴染４人のへんてこなお話。
小さな頃との変化と大きくなってからの後悔。
守ろうとして行った事に対するみんなの反応。
まだ小さいのだと感じさせられる。
６人の夢と友情、恋。
変わろうとしていても変われない心と関係に
６人はどうするのか・・・？
（多分）涙あり・・・感動ありの
「私たちのｃｏｌｏｒ」
中学生たちのちょっと変わった日常生活です。
自分と重ねてみてください

紹介します（後書き）

ぜひつづきも！！

入学！

「じりじりじりっ・・・」
「かちっ」
目覚まし時計を止めるとムクリと起き上がる。
少女は起き上がると大きくあくびをした。
少女の名前は「佐藤百合」
今日からピッカピカの中学一年生。
リビングに行くとお母さんとお父さんがすでにいた。
「お早う」
といわれると、百合は元気に
「お早う」
と応えた。
朝ごはんの用意が整うと百合は髪を結わいて席に着いた。
「まだ圭は寝てるの？？」
お母さんに言うと
「じゃぁ、そのお味噌汁を飲む前に起こしてあげて」
と返された。
百合は結局全部平らげてから圭と呼ばれる人のもとに行った。
「起きないと駄目でしょう！！」
とその少年を5分揺すぶると少年はやっと目を覚まし起き上がった。
顔の整っているその少年は起きると階段を降りていった・・・が
途中で踏み外し落ちた。

入学！（後書き）

やっとかけたぁ！！
達成感です

次こそ入学！！（前書き）

やっと入学すると思います

というか入学させなくては＞＜

ぜひよんであげてください！！

次こそ入学！！

下の階からお母さんとお父さんの笑い声が聞こえる・・・

我ながら息子が落ちたのに親に心配されないで笑われる弟が哀れだと思う・・・

しかも弟は私に向かい笑顔で

「いつもどうり、これですっきり目が覚めたよ。ははは・・・。」

という。

時計を見ると６：５０だった。

圭はオレンジジュースを飲んでサンドウィッチを食べている。

この家は変わっているらしく、朝食は百合とお父さんがご飯派でお母さんと圭がパン派である。

だが、お母さんの寝坊でたびたび朝食が全員パンになる事もある。

圭と百合は食事と着替え、歯磨きを終えると制服姿でリュックを背負った。

お母さんに

「二人とも似合ってるわよ。」

といわれ家を出た。

そう、今日は篠原中学校の入学式なのである。

あるマンションのエントランスへ行くと４人の男女がいた。

「おはよ～。ごめんね、遅れたかな？？」

百合が言うと一番左の少女が

「ううん、平気だよ。今ね、流（ながれ）と雪亜（ゆきあ）がね、圭の真似してたの！！」

すると一番右の少年とその左隣の少女が

「実湖！！」

といった。

きっと二人が流と雪亜なのだろう。

そして実湖が百合に話しかけた子だろう。

この会話に入らずに圭と話している少年は圭に

「？、時間大丈夫かな？？」

と聞かれ時計を見てみんなに

「そろそろ行こう！！」

と呼びかけた。

クラス分けの紙を見ると

３組が百合と？と雪亜と流で、５組が圭と実湖だった。

それぞれのクラスへ行き体育館へ移動すると長～い校長先生らの話になった。

入学式が終わりクラスに戻る。

百合は小さな声で

「やっと終わった」

とつぶやいた。

次こそ入学！！（後書き）

肩こったかもです。

どうだったでしょうか？

結構無理やりですが入学式終了です。

教室（前書き）

第三者の視点。

ちょうせんします＞＜

教室

入学式が終わった百合は教室にいた。

前後の席の子は知らない子達だった。

右隣の席は流で、斜め左の席には？だ。

百合は４列目の前から2番目の席だった。

そして６列目の一番後ろ（前から5番目）の席には雪亜がいた。

百合は早く挨拶を終えて帰りたがっていた。

今日は？の誕生日でパーティーを開く予定だからだ。

先生が何を言っているのか頭の中には入っていない百合はハッと我にかえり途中から先生の話を聞いた。

「・・・というわけで、明日から部活動見学が始まります。体験は来週からですので。それから・・・

えっと・・・あぁそういえば、明日は係り決めや委員会決め、自己紹介をクラスで行うので皆さん筆　記用具は持ってきてね。当たり前ですが。では終わりにします。きりーつ、気をつけ、れい。さよう　なら」

担任の先生の号令でみんな帰る準備を始めたりおしゃべりを始める。

百合も荷物を背負う格好になる。

すると

「百合〜！！」

という実湖の声が廊下から聞こえてきた。

勿論、圭も一緒だった。

百合が廊下に出ると雪亜と流も続いた。

？の姿は見当たらなかった。

あ・・・あれは！？（前書き）

こんにちは＾＾
楽しんでいただけると光栄です！

あ・・・あれは！？

校門を出た？以外の５人。

百合は隣にいる圭に小さな声で聞いた。

「本当に？をさがさないでいいの？」

圭は頷く。

圭は？のいないわけを知っていた。

だが、百合が聞いたらショックを受けるかもしれないと思い言わなかった。

（？は呼び出されていた。

小学校が同じだった女の子に。

多分告白をされるのだろう。

百合自身が気がついているのかは知らないが、百合は？のことが好きなのだ。

？も百合の事が・・・多分好きなのだと思う。）

圭は一人そんな事を考えていた。

［？視点］

入学式がやっと終わった←←

「あ・・・あの高橋君。
高橋？期君ですよね。
覚えてますか？
篠田有加（しのだありか）です。
帰りの会が終わったら、校門出てすぐそこの公園に来てください。
待ってます。」

・・・・・・。

最悪だぁ。

今日は何も話しかけられることは無いと油断してた。

「オイッ！」

後ろを振り返ると圭が怖い顔をして俺を見ていた。

「な・・・何？？」

圭は呆れ顔になって俺に言う

「さき帰ってるぞ」

聞かれていたようだ。

百合の耳にはいらないと良いのだが。

＞それから約1時間後＜

俺は篠田さんに言われた通りに公園に来ていた。

篠田さんはすでにいた。

「あっ！！高橋君！」

大きく手を振っている。

百合たちがここを通る前に移動しなくては。

「ちょっと、きて。」

少しは見えにくい建物の間に来た。

「で・・・・・・何？？お話って」

篠田さんは俺を見ながらもじもじしている。

正直、篠田さんのことは苦手だ。

「あのね。私と付き合ってもらえませんか？
去年からずっと好きだったの！！
だめ・・・・・・かな？」

「・・・ごめんね。
篠田さんの気持ちには応えられないんだ。」

謝って行こうとすると、そこには・・・・！！

あ・・・あれは！？（後書き）

やっとかけたぁ！！
告白シーン、ドキドキです。
皆さん！！
告白されたとき、告白したときの台詞をぜひ教えてください。
実は漫画のを真似しただけなので←
実体験のない私はこれしか出来ないので・・・・・・。
告白されたことないのに告白シーン書くのがこんなに大変だとは。

あれれ？（前書き）

テスト終了
返却が怖いです
皆さんの学校では順位って発表されますか？

あれれ？

＞?視点＞
そこには・・・百合たち5人の通り過ぎる姿があった。
見られてしまったかもしれない。
俺は焦った。
すると篠田さんが
「そう・・・ですか。安心してください。百合さんたちには言いません
せんから。では・・・。」
と言って笑った。
でも彼女の目は笑っていなかった。
まるで百合たちに言ってやるとでもいうような笑顔だった。
篠田さんはお辞儀をして歩いていった。
俺はこの場から逃げ出すように歩いた。
しかし、歩くのが早かったのか目の前にはそう百合たちがいた。

＞百合視点＜
何で？いないんだろう？
あ・・・れ？
?がいる。
あ！！
ヤバイ、こっち向いちゃうよ～！！
思いっきり目をそらすと圭が
「?どうかしたの・・・？」
と私をまっすぐ見てくる。
「あう・・・なんでもないよ。」
う・・・上手く笑えてるかな？
「まつげ長いな」

急に圭が言うので私はつい
「プ・・・ククククククク」
笑いがと・・・止まらない。
「ゆ…百合どうしたの？急に！！」
雪亜と流がハモッたので私の笑いは止まらなくなってしまった。
みんなも笑い出してしまった。

あれれ？（後書き）

後半コウがなかなか出てこないですが・・・
まぁいっか＾＾

まだ帰り道（前書き）

お久しぶりです！！
危うく、スランプ中になりそうでした！！
それでは
ぜひぜひ楽しんでいってください＾＾

まだ帰り道

＞百合視点＜
何も聞こえない・・・
何もいえない・・・
何も見えない・・・
何も感じない・・・
真っ暗で、音も風も何もない。
あぁ、また・・・・・・

「ジリリリリリ・・・・・・・」
あれ？
音がした。。。
「エッ？」
何の音かと振り返ると、
そこには？がいた。
「だいじょうぶか？」
？は百合を覗き込みながら不安そうに言った。
何故だろうか。
こんなにも誰かの声が暖かく感じられるなんて・・・。
「百合？ジリリの音聞こえた？
俺が言ったんだけど、気づいた？」
あ・・・れ？
涙が・・・。
止まらない・・・。
「百合どうしたんだよ。
何でないてるんだよ？」

まだ帰り道（後書き）

妙な終わり方で申し訳ありません！！
次回も読んでいただけるとうれしくて泣いてしまいます（笑）
では

涙のわけ？（前書き）

百合の涙のわけとは何でしょうか？
さくさく書いていきますので、
さくさく読んでくださるとありがたいです。

涙のわけ？

＞第三者の視点＆ａｍｐ；翌日＜

［百合・・・・・。

昨日のあの涙はもしかして・・・・。］

？は一人教室で考えていた。

昨日の百合の涙についてだ。

百合はというと、考え込んでいる？をチラチラと見ていた。

「・・・さん。・・・さん！・・・・藤（とう）さん！！」

百合は先生の声にハッと我に戻り、

「はい！！」

といった。

するとクラスの子みんなが笑った。

［な・・・なんか笑われてる！！］

流は百合に

「おま・・・お前じゃなくて。

加藤さんだぞ、呼ばれてたのは！！」

百合は顔を真っ赤にした。

？はそんな百合を見て微笑んだ。

？は今何をしている時間なのか分からず、

後ろの席の人に尋ねた。

「今って何してるの？」

？は声変わりしていないので、

少し高い声をしている。

ひそかにファンがその声を

「美しいソプラノ」

と呼んで騒いでいるらしい。

？の後ろにいる少年は

「自己紹介中だよ？
聞いてなかったりした？」
と？に聞いた。
雪亜は小さなため息をついていた。
［やっぱり流は百合が・・・］
雪亜は口に出しそうになってしまったこの言葉をぐっと心の中にしまった。
百合は自己紹介が自分の番になったので立ち上がり、口を開いた。
「佐藤百合です。
５組に双子の弟がいます。
入りたい部活は決まっていません。
１年間よろしくお願いします。」
百合はそれを言い終え座ると息を吐いた。
すると先生が隣に来た。
［エッ！！なんかしちゃったかな、私？］
百合はそう思ったがちがった。
「しーらーとーりー君！！
起きなさい～～～～～～！」
と流がたたき起こされた。
文字通りたたかれている。
流は「グハッ」と言い目を覚ました。
みんなそれを見て
［この先生を怒らせたら怖いのだな！！］
と思った。
すると
“キーンコーンカーンコーン”
鐘が鳴った。
先生が号令をかけて１時間目が終わった。
流と？はたわいのない話をしていた。
百合は雪亜と話していたが雪亜はロッカーに忘れ物をしたため、と

りに行った。
その隙に?は百合のそばに行き
「百合?
あのさ・・・昨日のって、
もしかして、あいつの事思い出したのか?」
?がそういうと百合はキョトンとして
「・・・・!!
違うよー。
この話は・・・あの子の事は圭の前で話しちゃだめだからね!!」
?に言うとちょうど鐘が鳴った。
“キーンコーンカーンコーン”

涙のわけ？（後書き）

〔あの子〕の正体はそのうち分かります。
突然ですが、百合のプロフィールを紹介します。
名前：佐藤　百合
誕生日：６月２１日
特徴：髪は栗色で肌が白い、パッチリ二重。
　あまり日焼けしないで皮がむける。
　前髪は特別分けたりしていない。
その他：過去に何かあったっぽい。
身長：１５７ｃｍ
体重：４１ｋｇ
ついでに？のプロフィールも紹介しちゃいます！！
名前：高橋　？
誕生日：４月８日
特徴：こげ茶色に金色の髪が混じっている、二重。
　肌は普通。
　髪はストレートで短すぎもせず、長すぎもしない無造作ヘアー
その他：モテます
身長：１６２ｃｍ
体重：５０ｋｇ
以上です！！

ため息は恋の予感！？（前書き）

楽しんで頂けると幸いです。

ため息は恋の予感！？

「ハーイ、２時間目始めるよー。
白鳥みたいに寝てるやつは締めるからね！！」
にこやかにこの言葉を言ったのは１－３担任の松村希美子先生。
皆その言葉を聴き〔ゴクリ〕と音を鳴らし、つばを飲み込んだ。
〔絶対に。間違っても寝ちゃだめだ！！〕
この教室にいる全員の生徒が思った。
「さぁて。佐藤さんまで終わったのよねっと。
じゃあ次からどうぞ、自己紹介をしてね。」
百合はさっきの？の言葉を思い出した。
『あのさ…昨日のって、
もしかして、あいつの事思い出したのか？』
〔？は忘れてなかった。
あの子のこと…良かった。
でも私、？に酷い言い方しちゃったなぁ〕
左斜め前にいる？を見ながら百合はそう思った。
すると？がいきなり立ち上がった。
「高橋　？です。
野里北小学校出身です。
今のところ、小説部に入りたいです。
これからよろしく！！」
？は笑顔でいい終えた。
？の笑顔が出た瞬間後ろの女の子が小さな声で
「かっこいい…。」
とつぶやいた。
百合はその声を聞くと胸がズキリと痛んだ。
百合はこの感情がいったい何なのか分からなかった。
しかし、この感情が小学５年生のときからあるものだとは気づいて

いた。
雪亜は百合をじっと見ていた。
それは流が百合の事しか見ていないからだ。
雪亜は嫉妬している心をうまく隠していた。
しかし、このため息だけは隠せない。
「はぁー。」
そして、自己紹介が自分の番になったのを確認し、席を立った。
「葉月(はづき)　雪亜です。
野里北小学校出身です。
音楽が好きです。
仲良くしてください」
少しはにかんで席に着いた雪亜はまた百合を見た。
視線には気づいていないようだった。

ーーーー1年5組の教室ーーーー

圭は自分の自己紹介を終えて席に着いた。
[本当だったらあいつも一緒にいるはずだったのに…。
俺のせいで…]
圭が考えていると前の席の人が振り向いてきて言った。
「あのさ…シャーペン貸してくんない？」
圭は我に帰ってシャーペンを貸し、自己紹介を聞いた。
ちょうど実湖の番になった。
「椎名(しいな)　実湖です。
よろしくお願いします。」
と簡単に挨拶をして座った。
すると、再び圭の前の人が振り向いた。
「今の子かわいいよな！！」
とわざわざ言ってきた。
圭はあいまいな返事をし、笑った。

圭は実湖が可愛いと思うが恋愛感情が湧かない。
［あいつに結局告れなかったなぁ…］
ポツリと思った。

ため息は恋の予感！？（後書き）

「あいつ」という言葉が大量に出てきました。
ま、それはさて置きプロフィール書きます！！
今日は百合となにやら三角形の雪亜と流です。
名前：葉月　雪亜
誕生日：１月２５日
特徴：髪の毛は黒い、二重です。
　元気っこで、よくスキップしてるらしい。
身長：１４９ｃｍ
体重：何が何でも教えてくれない
性格：めんどくさがり屋です。
その他：流に片思い中
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーー
名前：白鳥　流
誕生日：１０月３１日＝ハロウィン
特徴：髪の毛が短くて黒。
　八重歯がある。
身長：１５８ｃｍ
体重：４７ｋｇ
性格：皆で盛り上がるのが好きです。でも自分で盛り上げないと嫌
なタイプです。
その他：百合に片思い中
雪亜に体重は聞かないであげて下さい。
それでは＝3

部活はどうしましょう？（前書き）

こんにちは～
読んでくださるとは、
この上ない幸せです！！

部活はどうしましょう？

「さようなら」
先生の声の後にみんなで言うと流は百合に話しかけた。
「百合は部活どうするんだよ」
雪亜は少しむすっとしながら百合の隣に来て、流に言った。
「百合は私と実湖と３人で部活見に行くんだよ」
流が何でお前が出て来るんだ、とでも言いたげな表情を見せた。
そこに？がやってきた。
？は雪亜に
「どうしてそんなにむしゃくしゃしてんだよ？」
と問いかける。
雪亜はその問いかけに少し苦しそうな顔で？を見ると
「？には関係ないし！」
と言った。
百合は雪亜と？を互いに見合ったりしている。
そんなことをしていると、廊下から
「百合ー、雪亜ー」
と呼ぶ実湖と
「？ー、流ー」
と呼ぶ圭の声がした。

ーーーーー百合視点ーーーーー

？はいったい何部に入るのかな？
私は？の顔を思い出しながら考えた。
それにしても嫌だなぁ。
雪亜は不機嫌だし、実湖はなんかウキウキしてるし。
バランスがおかしいよ！！

あれなんだろう？
看板？
「ん？ねぇ、この看板可愛い！！しかも部活名がおかしいよ！！」
私が言うと2人は
「本当だ」
とそれぞれ違うテンションで答えた。
私は二人に
「ここ行きたい！！」
と言うと、雪亜はそっけなく
「いいよ。」
と答え、実湖はニコニコしながら
「行く！」
と応えた。
この部活で私達の何かが変わった気がする。
でも、それを知るのはきっとまだ。

ーーーーー？視点ーーーーー

俺は2人と一緒に小説部の見学中。
ここにはあこがれの先輩がいた。
某サイトで知り合った面白い先輩だ。
しかも、実際に会う先輩は超イケメンだった。
圭と流は小説部に入らないが俺はここに決めた。
入部届けをもらって小説部を出た。
次は圭と流の見たがっていた、あの不思議な名前の部活だ。
俺も少し興味がある。
俺はこの不思議な部と小説部のおかげで6人の関係がここまで変わるとは、まだ知らなかった。

部活はどうしましょう？（後書き）

やっと書き終わったーーー！
謎がまだ多いのでつまらないかもしれませんが、
この続きを知りたいのなら読んでください。
お願いしますｍ（＿＿）ｍ
それでは本日のプロフィールをどうぞ！！

名前：佐藤（さとう）　圭斗（けいと）
誕生日：百合と同じ６月２１日
特徴：髪の色はこげ茶で肌白です。
　実はお父さんにで、イケメンです
　向〇理に似てる
身長：１６７ｃｍ
体重：５８ｋｇ
性格：姉思い（シスコンではないです）で、優しく、頭良い方
その他：過去に何かある。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー
名前：椎名　実湖
誕生日：７月１１日
特徴：髪の毛の色は金髪で肌の色は普通。
　ハーフの影響で目は青い
身長：１５３ｃｍ
体重：３９ｋｇ
性格：頭が６人の中で１番良い。怒ると物を投げるので凶暴。心は
広いのに…。
その他：ハーフ。初恋がまだ

以上です！！
読むのお疲れ様です

何この名前！！（前書き）

さーて！！
いよいよ変な部活名が登場します！！
期待はしないでください
ブヒッ！

何この名前！！

ーーーーー百合視点ーーーーー
えーっと…体育館裏の部室にて？
体育館の裏に建物なんてあったっけ？
よし、実湖に聞いてみよう。
「実湖？体育館裏に建物なんてあったっけ？そこに部室があるらしいんだけど…。実湖？」
実湖はジッと何かを見ている。
なんかへんだなぁ、と思っていると実湖は我に返って
「あぁ、うん。なんかあったねぇ。ずっと気になってたけど部室だったんだ、あれ。」
と言った。
何故か実湖の頬は薄紅色だった。
あえてその事については触れないで置く事にした。
雪亜は後悔したときの癖が出ていた、耳たぶをこする癖。
何に対してかは幼馴染でも分からない。
私達は無言で1階へと繋がるこの階段を降りていく。
すると雪亜が急に
「ねぇ、百合はさぁ。？と流のことをどう思う？」
と私に真剣な眼差しで見てくる。
「？のことはよくわからないの…。でも流の事は大切な友達であって幼馴染。もちろん？の事も大切だけど、なんか違うんだよね。」
本当に？の事は自分でも分からない。
大切なんだけど、皆や圭ともなんか違う。
「そっかぁ。ねぇ、体育館に行く道って右だっけ？左だっけ？」
悩んだりしているうちに1階についていた。
雪亜の質問には実湖が答えた。
「左だよん」

実湖は再び上機嫌に戻ったようだ。
しばらく歩いていると
「あ！！在ったよ！」
扉を見ると部活名が書いてあった。
ピンクやブルーでカラフルに
「『ｃｏｌｏｒ部の部・室です。』だってさー。」
いつものテンションに戻った雪亜が言った。
そう、変な名前の部活とはｃｏｌｏｒ部という名前のこの部活。
いったい何部なのかな？
”キィー”と言う鈍い音を出すドアを開けた。
そこには黒い長い髪の毛を持つ肌白の先輩と可愛らしいという印象を持たせる先輩がいた。
リボンの色が私たちのピンクではなく水色だった。
２年生だ！！
「こんにちは」
と言うと先輩たちは顔を見合わせ
「可愛い！！」
と私たちに抱きついてきた。

ーーーーーー？視点ーーーーーー
俺が入部届けだと思っていたのは見学者用のパンフレットだった。
小説部専用の。
俺たちは２階にある小説部の部室兼コンピューター室を出て階段を降りていた。
すると圭が真剣な顔で俺と流を見ていった。
「？と流はあいつの事忘れてないよな？」
百合と圭の前であいつの話をしないって約束したばっかりなのにー！！！
「あいつってだ・・・。！！」
俺は急いで誰かと聞こうとした流の口をふさいで口元でささやいた。

「馬鹿！！あいつって言ったらシオンの事だろうが！！」
圭は不審そうに
「？？どうしたんだ？」
俺は焦って天井を一瞬見て首を振りながら答えた。
「別になんでもないよ。」
そうして手を離すと流が怒りながら俺を見て言う。
「？！！前からお前には言いたい事があったんだよ！お前は百合の事どう思ってるんだ？」
…。
「どうってお前、皆も大切だけどなんか違うっつうか…んーよくわかんないけど特別かな？」
圭は俺を驚いた表情で見ている。
流は勝ち誇ったような表情で見ている。
「？…俺は百合が好きだ」
俺は流の言葉に動揺してしまい、目をそらしてしまった。
「？、流。本人の気持ちを無視しちゃだめだからな。」
俺はうなずき、流に向かい言った。
「流。今までどうり友達なのは変わんないけど、俺の気持ちも変わんないからね」
流は了承したのか部室に向かい歩みを再開した。

何この名前！！（後書き）

新しいキャラが3人で増したねぇ。
追々みなさんに紹介しようと思います。
それでは。
皆さん、読んでくださってありがとうございます！！

部活は何にしようかな？（前書き）

こんにちは。
そろそろ「あいつ」の正体が出せるといいな。
では楽しんでいただけるのをかけるように頑張ります。

部活は何にしようかな？

ーーーーー百合視点ーーーーー

抱きついてきた先輩方は笑いながら私たちの背中に回っていた手を離した。

「ゴメンナサイ。急に抱きついちゃった」

黒い髪が印象的な先輩が言った。美…美人だ。

すると可愛いと思わせる印象がある先輩がフゥーと息を吐いて言った。

「でも、来たのが人間で良かった。」

？

人間で良かったって何事？

黒髪の先輩が慌てて訂正した。

「ち…違うでしょう！先生じゃなくてでしょう。もうー」

きれいな黒髪が揺れた。…？

誰かに似ている。もしかして詩音？まさか…ね。

「んにょ！！間違えちゃった。」

可愛いと思わせる先輩が言った。んにょとは？

んにょ先輩はニコッと笑った。んにょ先輩ははっと我に返った。

「そういえば自己紹介してなかったね。私は市川　美和だよ。」

「あたしは笹宮　詩庵です。」

私の頭の中で黒髪の先輩から笹宮詩庵先輩。可愛いと思わせる先輩ことんにょ先輩は市川美和先輩。

詩庵…？偶然なのかな？詩音と名前が似ている。

私がそんなことを考えていると雪亜が

「私は１ー３の葉月雪亜です。」

と自己紹介した。それに続いて私と実湖も

「同じく１ー３の佐藤百合です。」

「１ー５の椎名実湖です。」

と自己紹介した。
“キィー”
扉が開いた。

部活は何にしようかな？（後書き）

これから寝ますので。
おやすみなさい＾＾

扉以外からの登場をしろと？（前書き）

こんにちは＾＾
少し短いかもしれませんがご了承ください。
すいませーんｍ（＿＿）ｍ

扉以外からの登場をしろと？

“キィー”
扉から入ってきたのは男の人が2人、女の人1人だった。
男の人の身長が高い人は茶髪で整った顔だった。
もう一人の男の人は茶髪の人よりは身長が低いがそこそこの身長で、
綺麗な深緑の髪を持っていた。そして綺麗な輪郭の持ち主だった。
女の人は綺麗なオレンジ色の髪だった。目の色も綺麗な金色だった。
雪亜は本当に驚いた性か、変な文章で言った。
「きゅ…急に人が！！扉から出て来るんだや…。」
女の人はくすりと笑って
「訛ってるよ。後…文章がヘンだよ？」
と言った。美和先輩は真剣な顔で私たちに言った。
「ここは窓無いからこの扉からしか入って来れないんだぁー」
「いや、この扉以外からの登場をしろと？」
茶髪の先輩が雪亜に突込みを入れた。
キョトンとしていると実湖が自己紹介をし始めた。
「あの…私は1－5の椎名　実湖です。」
それに続いて私もする。雪亜はショートしているようだった。
「1－3の佐藤　百合です。」
雪亜はいつの間にか元に戻って
「同じく1－3の葉月　雪亜ですぅー。確かに扉しかないです。」
そういうと茶髪の男の人が
「俺は山口（やまぐち）　仁（じん）でこの髪の毛が印象的な男が高山（たかやま）　純（じゅん）で
この女は木田（きだ）　亜衣（あい）。詩庵様たちはもう自己ショーかいしたのか？」
一気に3人分紹介した。私達はただ、はぁ、と言うだけだった。
すると詩庵先輩は仁先輩に近づいてもぅ、と言った。
「あ！！背中にゴミついてるよ。ほら向こう向いて。」
といって思いっきり背中を叩いた。詩庵先輩はにこりと笑って

「誰が詩庵様よ！！その呼び方がドンだけ嫌いかあんた知ってるでしょう」
と怒った。怒っていても可愛い。
するとしっかり者の実湖が
「あの…ｃｏｌｏｒ部ってつまりは何部なんですか？」
あ…忘れてた。それを聞こうと思ってたんだ。亜衣先輩はニコッと笑って、
「奥を見れば分かるかな？どうぞ！」
ともう一つある扉を開いた。そこには楽器があった。
「わぁー！！」
私は父が音楽好きなため、ギターが弾ける。もちろん圭も。
雪亜はお父さんの将人（まさと）さんが有名なバンドのドラムだったのでドラムが置いてあるところに行き、目を輝かせた。
「かっこいいー！！これ、どなたのですか？」
その声にこたえたのは意外な人であった。
「ハイ！うちのだよー」
その声の持ち主は美和先輩だった。雪亜がドラムしているのは見慣れてるからなんとも思わないけど、
美和先輩は元気っこぽいけどドラムはないと思っていた。
と言うか…この部って
「いわゆる軽音部ですか？」
その質問にも亜衣先輩が答えた。
「百合ちゃんせいかーい！！私が部長だよ。副部長は仁なんだよ。」
“トントン　キィー”
扉の開く音がした。

扉以外からの登場をしろと？（後書き）

スイマセンです。
次こそプロフィール書きますから。
おやすみなさい

失礼しまーす。（前書き）

お久しぶりです。
どうか楽しんでいってください。

失礼しまーす。

「失礼します。見学に来ました…。」
亜衣先輩は扉のほうを見に行って驚いた。
「わぁっっ！！百…百合ちゃんと同じ顔だぁ。」
…ということは。
「圭？来たの？」
私は扉のほうに向かって言うと、向こうから驚きの声が聞こえた。
「百合たちも来てたのか？驚いた。」
圭の声だ。何故か“驚いた”が棒読みだった。そこに？の声が突っ込みを入れた。
「お前、驚いてないじゃん！！」
？の突込みを聞いて先輩たちが「くすくす」と笑っている。
3人はこっちに来て自己紹介を始めた。
「百合の双子の弟の圭です」
「俺は？です」
「俺は流です」
先輩たちも一人ひとり自己紹介をして亜衣先輩が
「そういえば私たちの担当楽器紹介してなかったね。私はボーカル兼キーボード」
と言う。それに続いて仁先輩とが言う。
「俺はギター」
「…俺はベース。たまにボーカル」
「うちはドラムです！！」
「私はギター。皆はもう何やりたいとかあるの？」
詩庵先輩の質問に私が答えた。
「ギターを」
「うちはドラムです」
「雪亜はやっぱりドラムなんだ。私は…ベースを」

実湖のお父さんも音楽好きでベースを教えてもらっているらしい。
流は楽器が全然出来ない。圭は勿論
「ギター」
と簡潔に答えた。
「俺は…何も楽器できないからなぁ…」
?がそれならと言って。
「キーボードやれば?実湖がピアノやってたんだし、教えてもらうとか。」
「あぁー…」
仁先輩がそれを聞いて言った。
「亜衣も確か部活入ってからキーボード始めたよな?」
「うん」
?はフーンと言うと少し困った感じで私に
「俺は入部しないから良いよな。言わなくても。」
といってきた。私は頷きながら
「?は言わなくても良いんじゃない?小説部はいるの?」
?ははにかみながら頷いて
「憧れの先輩に会えたから、これは会わなくっちゃって思って」
と言った。
ヤバイ。なんか胸がきゅんとする。この感情は何?

失礼しまーす。（後書き）

百合の乙女編でした。
それではプロフィール行って見よう！！

名前：笹宮　詩庵
誕生日：３月１４日
特徴：黒髪ロングヘアで、黒目。色白
身長：１６２ｃｍ
体重：き…聞かないで！！
性格：怒ると怖い。それ以外はこれから分かってくるのでヒ・ミ・ツだそうです。
その他：もてます。美人です

名前：市川　美和
誕生日：６月２０日
特徴：黒髪でボブ。肌は普通の色。コンタクトをしています。
身長：１５４，３ｃｍ
体重：４２ｋｇ
性格：元気がトレードマーク。パニックになると落ち着くのに少し時間がかかる。
その他：可愛いけど変な人です。

せっかくだし・・・（前書き）

それじゃあ、行ってみよう

せっかくだし・・・

「あっ！！良い事思いついちゃった」
亜衣先輩がそう言って先輩方５人で集まり、何やら会議を始めた。
なんとなく私たちも輪になってお話をする。
実湖が小さな声で
「ねぇ、私ココの部に入るの決めたよ」
と宣言した。
「うちも！！ココに入ってドラムやりたいの！」
雪亜も宣言した。圭も
「俺もギターやりたいし。百合は？」
宣言をし、私に聞いてきた。
「・・・ギターやりたいケド。でも私、圭ほどギター上手くないよ。」
私が小さな声で言うと、？が私に言ってくれた。
「でも、ギター弾けるのはすごいじゃないか？俺なんてコードも分からないし・・・。」
でも・・・って、？はピアノ弾けるじゃん。
クラシックもジャズ（詳しくは私も知らないけど）も。
この間はＪ－ＰＯＰを弾いてくれたじゃん。
だけど、そうやって？が言ってくれると
「そっか。？がそんな風に言ってくれるとその気持ちに答えようって思うよ」
本当にこう思う。
？は少しほっぺを赤くした。
可愛すぎるよ！！いまの？は可愛すぎるってばぁ！！
「ねぇ、百合。その気持ちってコ・・・」
雪亜が“コ・・・”まで言うと実湖の左手が雪亜の鳩尾に入った。
「イッた！！」

実湖は雪亜のその声に
「ワァッ！！ゴ・・・ゴメン。このペンのキャップが上手く取れなくて。」
とわけを説明した。
雪亜は回復したのか
「貸して！！うちがやってあげる」
と言ってペンを手にした。
すると亜衣先輩が
「ちょっとイイ？せっかくだから私たちの演奏を聴いてもらおうと思うの」
そう言った。
「やったぁ！！」
私達はそういって横１列に並んだ。
すると隣に？がいた。
頬がほころんでしまう。
先輩たちは楽器を用意し、スタンバイに着いた。
亜衣先輩が代表して司会を始めた。
「では、聞いてください。私たちＳｅａｓｏｎ　Ａｌｌで『雪のプレゼント』です。ボーカルは潤」
美和先輩がカウントする。
「１，２，１，２，３ー！！」

せっかくだし・・・（後書き）

いかがでしたか？
今日は亜衣と仁のプロフィール紹介です。

名前：朝田　亜衣
誕生日：４月６日
見た目：オレンジ色の髪と金色の目。セミロングヘア
身長：１６２，４ｃｍ
体重：最近はダイエットしてたから変わったと思うけど４９，７ｋｇ
性格：リーダー性がある。
その他：外人ではありません。
――――――――――――――――――
――――――――――――――――――
――――名前：山口　仁
誕生日：１２月７日
見た目：茶髪、茶色い目。茶髪だけどチャラくはありません。
身長：１７９ｃｍ
体重：６２ｋｇ
性格：優しいのでもてるが、気持ちに気づかない（鈍い）
その他：もてる。

以上です！！

凄い、、、ｂｙ幼馴染６人組（前書き）

お久しぶりです。
更新が遅くなってしまい申し訳ありません。
言い訳・・・なんですけど、世も末ですね。
期末テスト週間中だったんですよ。
地獄は続きます。
テスト返しという悪夢！！
だけど、そんなん忘れて書きます！
つづきを

凄い、、、ｂｙ幼馴染６人組

・・・。

「凄い。感動したぁ！」

私が言った言葉に雪亜が

「やっぱり百合もそう思う？潤先輩の美声といい、あのドラムさばきといい！！」

この話の内容はというと約３０分ほどさかのぼる事になる。

――――――約３０分前――――――

ドラムの美和先輩のリズムに乗せて曲が始まる。

「１，２，１・２・３―！！」

そして、キーボードの綺麗なメロディーがとても印象的だった。

潤先輩が口を開いた

「あの夢の日に　僕は雪が降ったことを忘れないだろう

その日は君と　君と別れを　決めた日だったのだから

僕の寿命　君との時間は　何かによって　むしばまれていく

僕の体が動くのが　時間がまだある証拠　でも痛みが消える事はない」

私たちきっと口をポカンと開けていたのだろう。

だって、潤先輩の声は美しいから。

「僕の体が止まる　あぁ　タイムリミット

さようなら　君との時間が愛おしい

Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ　ｆｏｒｅｖｅｒ．」

最後の英語で曲は終わった。

再び潤先輩が口を開いた。
「次は美和が唯一歌う曲。【知らない】」
美和先輩は1曲しか歌わないんだ。何で？
「いくよー！！1，2，1・2・3ー！！」
次はゆったりとしたリズムでギターの音とベースの音が綺麗にハモっている・・・と思う。

「Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ．　Ｂｕｔ　ｙｏｕ　ｄｏｎ'ｔ　ｋｎｏｗ．
君はそのまま知ることはない
私が暗い闇にいることを
君に救われ　今があることを」

潤先輩と同様、美声だ。
それにしても・・・1曲なのは何でだろう？
終盤に入った。

「君は全てを知っていた
知らないのは自分
きっと　知らない人はいない
僕らの愛の大きさを」

これまた感動だぁ！！
そんな風に思っていると、再び美和先輩が口を開く。
「えへへ。次は亜衣の歌う【ケーキとコーヒーと紅茶】ですぅ。そんじゃ行って見よう！！
1，2，1・2・3ー！！」
なんか明るいイメージの曲が聞こえる。
リズムは乗りやすい感じだ。

「勇気ってどんな形しているのかな　甘いケーキを食べて考える
温かいコーヒーと紅茶香りながら　君は言うよ
勇気って形がないからカッコイイんじゃないの」

かわいらしい声の亜衣先輩の声。
つい、リズムに乗ってしまうのは私だけではないようだ。
隣で？が膝の上で指をリズムに乗せて動かしている。
目が合うと？がニコリと笑った。
曲の終盤に入った。
「ｔｈｒｅｅ！　ｔｗｏ！　ｏｎｅ！　Ｇｏ↓！
ケーキとコーヒーと紅茶と君が待ってくれている
私の居場所へ・・・。
ありがとうを・・・。」

そして、先輩たちは私たちの前へ出て礼をした。
？は拍手を送っている。
私も送る、大きな拍手を先輩方に、心を伝えるように。
いつの間にか、私達は先輩たちに全員で拍手を送っていた。
隣の？は私に小さな声で
「いつか、百合たちの演奏をこうやって聞いて拍手を送るんだと思うと楽しみだな。」
？の馬鹿！！照れさせるな！！
なんて本人には恥ずかしくていえないけど・・・素直に嬉しかった。
？の期待にこたえたいと本気で思った。
カラオケに行った事がない私は、自分の実力が分からない。
音楽の時間は皆で歌ってるから声小さいし。
今度皆で行ってみよう。
心の中で思っていると、亜衣先輩が
「実は美和はあの１曲以外の曲を全部私に押し付けてきて、歌ってくんないのよ」

美和先輩はいがいと押しが強いのかな？
「そんなことココで暴露する事ないじゃん」
と慌てる美和先輩。っと、歩き出して潤先輩の斜め前あたり来ると
「キャッ！！」
と転びかけた。それを・・・潤先輩がサッとキャッチした。
「危ないだろ。まったくもう」
と笑った（微笑んだ？）。
それを見て実湖が
「やっぱり潤先輩ってカッコイイですよね！！私のクラスにいる子が皆惚れちゃうかも！！」
と言った。すると美和先輩は
「ほぇー！！潤、惚れられちゃうって！！良かったねぇ」
と嬉しそうに喋っている。と潤先輩の腕から抜けながら。
美和先輩は潤先輩に満面の笑みを向けている。
やっぱり可愛い人だ。

＝＝＝＝＝現在＝＝＝＝＝

それが３０分ほど前の話。

凄い、、、ｂｙ幼馴染６人組（後書き）

名前が出てこない人がいましたが・・・
それはこちらのミスです。
スイマセン。
それでは！！

ある朝の日に、、、ｂｙ双子（前書き）

コンバンワ＞＜
これからさくっと書こうと思います♪
そんじゃあ、行って見よう「（＜０＞）」

ある朝の日に、、、ｂｙ双子

あぁ、またあの夢を見ているのか。
あの暗い、闇のように深い夢の世界だ。
そんな風に考えていると誰かが言えるのが見える。。。
誰？
・・・アレは！

【ジリリリリリリリリリリ！！】

ん？
朝か。
それにしたってあの頃の夢を見るのはいつぶりだろうか？
頭がボーっとしている。
今日は血圧が低くてベットから起き上がれない。
頑張って体をベットから起き上がらせ、階段を降りようとすると珍しく落ちた。
圭の事を言えなくなった。
でも、圭のいうとおり目が覚める。
「あら？圭じゃないの？珍しいはねぇ、百合が階段から落ちるなんて。というか、圭がこの時間に起きてくるのがもっと珍しいか。。。」
ソファーにいる母親は相変わらず、圭に辛口コメントだ。
テーブルで新聞を読んでいる父親はと言うと
「こらこら。いない人をからかうんじゃない。」
と言って笑っている。
いないと言うか、寝てるが正しい表現なのだが・・・。
うちの家族は寝起きの圭だと全員が天然と言われている。
私は違う・・・と言い張っては見るものの、全力で拒否られる。

圭は寝起きでなければ辛口なので、誰も敵に回したがらない・・・
かもしれない。
かもしれない、については今度詳しく話そう。
私のいつもの席にはおいしそうなスクランブルエッグとミネストローネがあった。
母親は圭に似た笑顔で
「パンはいる？」
と聞いてきた。あまりパサパサしたものは食べたくないので
「いらない。お父さんは急がなくて平気？」
と言った。父親は
「今日はな。ゆっくり出来るし、圭のこと起こそうかな？」
と立ち上がり、階段を上っていった。
私と圭のお父さんは実は仕事を掛け持ちしているのでゆっくり家にいる事があまりない。
仕事はって？
プライバシーは守る主義なので黙秘します。
今更かっていう言葉は耳から入ったが気にしないことにする。
やっと頭が治ってきたと思ったら
「うわぁ！！」
と、階段から落ちた弟がいた。
「痛かった。でも、目は覚める。・・・？父さん、どうかした？父さん？海（かい）さん？」
お父さんが上でボヘッとしている。
海とは私の父親の名前だ。
「い・・・痛そうだな。父さんも階段一段踏み外して、足くじいた」
と・・・痛そうにいう。
母親は
「海さん大丈夫？圭も頭うってない？3人して、今日は悪運が強そうね」
と豪快に大きな声で笑いながら、言った。

母親はこの辛口がなければ・・・
つまり、口を開かなかったら美人な２０代前半に見える。
実年齢は３７歳。
プライバシー？
この人にそんなものは必要だろうか？
こんなに笑われてはこの位！！
圭は席について大きなあくびをした。
そして、私を見てにこりと笑う。

ある朝の日に、、、ｂｙ双子（後書き）

・・・百合&圭の家にしかかけていないという。
進みがない。
次は学校で運命の歯車が動き出すかもしれません！
百合のではありませんが。
テンションがヘンなので、撤退します。

私の秘密（番外編）（前書き）

詩っぽく書いてみました。
ある一人の心の中です。
皆さんはいったい誰の事だかわかるでしょうか？

私の秘密（番外編）

彼は気づいてくれただろうか。

あの子の大好きだった彼は私の秘密のあの子との関係に。

私は彼に2，3回会った事がある。

その頃、彼もあの子も小学生で幼い顔立ちだった。

彼女も同じ病室にいたから気づいてるかもしれない。

そして、あの子を見殺しにしたも同然のあの女の子。

あの女の子は・・・あいつは中学生になった。

でもあの子は？

あの子は今も小学生の頃の、幼い顔のまま写真で笑ってる。

もう成長した顔も見れない。

同じ中学校に行くはずだったあの子はあいつに・・・・。

あの子にまた「お姉ちゃん」と呼んでもらいたい。

もう一回喧嘩だってしておきたかった。

お姉ちゃんらしく勉強を教えてあげたかった。

ごめんね・・・「???」

私の秘密（番外編）（後書き）

いったい誰の事でしょうか。
それを知ったとき、
真実を知ったときにあなたはどう感じますか？
私はきっと心から思います。
過去は変えれないものなのだと・・・。
詩っぽく書いたのは裏設定で
「国語の時間」
であったからというどうでもいい設定があるからです。
どんどんシリアスになっていったらスイマセン

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1911x/

私たちのcolor

2011年12月11日19時45分発行